

診療録直結型糖尿病データベース（J-DREAMS）を用いた臨床研究

大杉満

国立国際医療研究センター 糖尿病情報センター・センター長

糖尿病の治療実態や合併症の状況を定期的に把握することは、現在の診療状況を評価・分析するだけでなく、経時的な比較を行う上でも必要である。糖尿病診療の実態調査による基礎データを用いることは、合併症抑制などアウトカム改善のためによりよい診療指針を決定するために必須である。

そこで、データ入力の手間と労力を減らし、投薬や検査結果などの自動取り込みを行うことで、登録患者数・収集項目・データポイントの増加を容易にし、リアルタイムでの状況把握を行い得るデータベース研究が企画された。それが国立国際医療研究センター（NCGM）が日本糖尿病学会と共同でおこなっている、Japan Diabete compRehensive dabase project based on an Advaced electronic Medical record System: J-DREAMSである。患者の背景情報や日常臨床の状況は、糖尿病標準診療テンプレートを用いて入力し、ベンダーごとの電子カルテの違いを乗り越えるためにSS-MIX2標準データ格納システムを用いて蓄積され、多目的臨床データ登録システム(MCDRS)を使用してデータ抽出と送信が行われる。

現在54病院、患者約63,000人が登録されているが、2020年を目処に10から20万人のデータベースを構築する予定である。現在は大学病院など専門・中核施設が大半であるが、日本医師会データベースとの連携を予定しており、日本全国の糖尿病診療の実態を知りうる情報基盤を目指している。

将来的にはこのデータベースを用いて、基本データの定期的発信を行う他、糖尿病と合併症に関する基本情報や、危険因子の同定のための研究に用いる予定である。今回の発表では、糖尿病の合併症でも重要なものの一つである、腎症に焦点を当てて報告する。解析の結果、高血圧症の存在、ならびにそのコントロールが腎機能の保護に重要であることを示唆する結果が得られている